
午後に伸びる影 -ホラー短編小説集-

光差す海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

午後に伸びる影 - ホラー短編小説集 -

【Nコード】

N9808G

【作者名】

光差す海

【あらすじ】

日常に潜む影、人の恐ろしさ、或いは物悲しさ、そのような物を描いたホラー短編集です。怖いかわかりませんが、夜中に一人で読むと結構涙目かもしれません。

第一話 嘆きの人形

小学六年生の三月明がある日家に帰って、薄暗く長い廊下を通り、一番奥まった陽の当たらない自分の部屋で勉強をしていると、二階のほうでガタンゴトンとしきりに音がする。この時間は、お父さんもお母さんも仕事に出かけているし、お爺ちゃんは一階に自分の部屋があつて、足も悪いし、滅多に二階には行かないはずなのに、と不思議に思つた明は、もしかや泥棒かもしれない、と思つて、この古びた造りの無駄に広い家にため息をつきながら二階に向かつた。

薄汚れた窓から夕陽が差し込んでくる。ふと見ると窓から天井にかけて蜘蛛の巣が薄く張つてあり、ゴルフボールぐらいの体の蜘蛛が陽の光を浴びて大きく壁に写し出されてとても不気味だ。後で箒ではらつてやる。そう思いながらお爺ちゃんに部屋の外の障子から声をかけても返事がない。そつと開けると、眠っているようだ。万が一の事を考え、庭へ出て金属バットを取ってくる。耳はさつきから意識して澄ましているが、あれ以降音は途絶えている。二階へ上がり、全部で七つもある部屋を一個一個入つて見て回つた。両親の寝室と、書庫もどきの部屋以外は、物置状態か、がらんどつである。明の部屋の真上に当たる部屋に入る。ここも何も置いておらず、閉め切りに近い。角度的に夕陽と真逆なので、とても薄暗い。もちろん中には誰もいない。息を吐いた明は、腹いせにバットで素振りを何回かして、部屋を出た。

自分の部屋に戻ると、プラモデルや野球選手のサインが書かれたボールなどを飾っている戸棚の扉が開いている。何か盗まれたのかも、と思つて一通り見ても、無くなっているものは無かつた。その中に、もう亡くなつたお婆ちゃんが海外旅行で買つてきてくれた、アフリカかどこかの守り神の人形がある。目は大きく、髪の毛はド

レッドで長く、顔自体も大きく、ユーモラスで愛嬌のある人形で、着ている服も民族的で洒落なので、気に入って飾っているものだが、それが今見ると何かしら妙な感じがする。明は疑問に思っ、その人形を取り出してみた。両手で普通に持てる程度の大きさのそれをまじまじと見つめて、なんとなく表情がきつくなっているように感じた。でも、気のせいだ、と思い、人形をしまい、戸棚を閉じ、再び宿題に取り掛かる事にした。

「明、今日ゲーセン行こうぜゲーセン」

と、友達の健に誘われ、二人は学校の終わった放課後、駅前のアミューズメントセンターに行っ、対戦ゲームをした。明の家は古い地主らしく財産だけはあるようだが、父も母も定職につき、夜遅くまで帰ってこない。自然、明もほったらかしになり、晩御飯は祖父が作るか、買ってくるか、店屋物のどれかになる。でも、明は孤独感などは余り感じなかった。ただ、淡々と生きていた。そんな明に、せめてもと祖父はお小遣いだけはたくさんくれるのだった。

「もう飽きたな」

剛はそうばやいて明のプレイを眺めていたが、ふと思ひ出したことがある。電車に乗って二駅のところ、新しいゲームセンターが開店した、と兄貴が言っていたのを。

「おい、明、真星駅のとこにできた新しいゲーセンを攻略に行こうよ。すんげーでかいらしいぜ」

「本当？そんなの出来たの。じゃあ行ってみようか」

そして二人は電車に乗り、目指す駅で降りた。市内の中心部の繁華街であり、人は大変多い。二人は期待に胸を躍らせながら、目的地のゲーセンを探すものの、なかなか見つからない。名前だけしか知らずに探すのは無謀だったぜー、と健が反省しているうちに、裏通りのな道に迷い込んだ。左右には、けばけばしい風俗店やラブホテルが並んでいる。

「なんかすごいとこに迷い込んだぞ」

店の前に立つ黒服の兄ちゃんが坊主ら、寄ってくか？なんて笑いながら声をかけてくる。二人は固まって急ぎ足でそこを抜けようとした。ふと明の目に見慣れた人が映った。見慣れたも何もそれは父親ではないか。いけない、こんなところに遊びに来ているのがばれたら叱られるかも、と思って顔を伏せた時、意外な光景が目に入った。知らない女性が父親に寄り添って、腕に絡み付いているではないか。お母さんじゃない、と明が思った瞬間、父親がこちらを振り向いた。明は視線を逸らし、人ごみにまぎれたが、見つかったかもしれない。

「よう、明、どうしたのさ」

健が怪訝な目で問いかけてくる。明はなんとも答え辛く、なんでもないさ、とだけ言った。すでに父親の姿は見えなくなっていた。

その夜、少し遅くに昭は帰宅した。祖父が、どうしたんじゃ、と聞いてきたが、本屋で漫画読んでた、と嘘を言った。祖父は、明の言う事を何でも疑わない。根っから素直ないい子だと思っっているし、それは事実でもある。このところ、だいぶ大人になってきている、と見て、段々両親の悪口なども言うようになってきている。殆ど家にいない、掃除もしない、駄目な夫婦じゃ、ああなつてはいかんぞ、と。明は、今日の事実を一瞬だけ言いたくなつたが、まだその意味もはつきりわからないし、言えば何か大変な事がこの家に巻きおこる、と言うような予感を感じ、黙っていた。食事を終え、部屋に戻ると、また戸棚が開いている。立て付けが悪くなつてゐるのかな、と思つて閉めようとする、床の絨毯にあの人影が転がり出ている。あれ、などと思いながら拾う。顔を見た瞬間、思わず明はうわつと声を上げて投げ捨ててしまった。なんだ！顔が怒ってるぞ！？心臓の鼓動が激しくなつた。もう一度、恐る恐る見てみる。確かに、顔の表情が変化し、怒りの表情だ。眉が釣りあがり、口が開いている。顔の部分を触つてみる。粘土を固めたような素材で、叩いても何も変わらない。一体どうなつてゐるんだろ？明はベッドに座り、し

げしげと人形を眺める。死んだ祖母、一緒に住んでいる祖父の妻だった人は、癌で三年ほど前に死んでしまったけど、いつもとても優しくったのを覚えている。この人形も、明の幸せを守ってくれるものだよ、と言つて贈つてくれたつけ。祖母の思い出の懐かしさに思わず涙ぐんだ明は、それをベッドの頭のところの本を置いたりする棚に置き、今日見た父は本人だったのだろうか、もしそうならあの女の人は誰だ、浮気というやつなのか、とまだ足りない知識で考えたりするのだった。

ある日曜日、両親が祖父を誘つてどこかに出かけていった。なぜか明は誘つてもらえず、この広い屋敷に一人で留守番をすることになった。午後の光のさなか、がらんとする空間の片隅の部屋で明は一人映画を見ていた。コメディ映画なので、一人クスクスと笑っていたら、ガタツ、ピシツと音がした。明がなんだ？と思つたら、今度は家がきしみ、揺れだした。地震か！？と思うほどに微妙に家は震え、明は怖くなって蒲団を被った。しばらくすると、収まったが、しばらく蒲団に包まって震えていた。やがて、明が恐る恐る蒲団を出ると、頭の上にあの人形があつた。思わず手に取ると、あれ以来ずつと怒り顔だった人形の顔が変わっていた。

「な、お前、悲しんでいるの？何を？」

人形は今にも泣き出しそうな顔をしていた。本当に涙が出ているんじゃないかと思つた。その時、音もなく部屋の扉が開いた。明はビクツとなつてそちらを見た。が、しかし、誰もいなかった。家はしんと静けさを取り戻し、午後の穏やかな時間は戻ってきたのだつた。明は人形をきつく抱きしめた。何か胸が轟くような予感に体が疼く。明はいつまでもそうしていた。そうしているうちに、眠気を覚え、意識を失った。

「良一がドライブに誘つてくれるなんて本当に珍しいのう」

明の祖父、文太は助手席で満足そうに言つた。後席には娘の祥子

も座っている。化粧が濃く、けばけかしい印象を覚える。

「たまには家族みずいらずもいいでしょう」

髪を綺麗に撫で付けた、少し二ヒルな男前の良一はそう言いながら白のキャデラックを山麓に向かわせている。

「しかし、それなら明も誘うてやればいいではないか」

「何か用事があるそうで」

と、後ろから祥子が言う。心なしか顔が蒼ざめている。

「それよりお父さん、その緑茶おいしいでしょう」

「うむ。緑茶が何よりの好物じゃ。あと、この羊羹ようかんもおいしいの」

良一は内心にやついている。後は、誰にも見られずに事を終えられるかだ。車は速度を上げて山間の暗い林道を走っている。

「はて、この道で願光寺にいけるかの？」

今日は三人で先祖のお墓のある氏寺に参ると言う事になっているのだが。

「大丈夫、着きますよ」

そう言っている内に、文太を激しい眠気が襲ってきた。やがて、いびきをかき始めた。

「寝たわね」

「うん。よく効いたな。さて、後は力仕事だな」

良一は不敵にそう言つと、前もって下見しておいた場所に車を止めた。すぐ前に、有名な滝を見下ろす事が出来る空き地がある。休日の昼間とは言え、こんな奥地にまでは誰も足を運ぼうともしない。おまけにその滝は有名な自殺の名所なので、不気味さも手伝つて、案の定人気は全く無い。

「さて、やるか」

良一は手袋をはめ、祥子は用意した遺書を準備する。

「お父さん、ごめんね。貴方が死ねば遺産を分配して綺麗に離婚が出来るの」

などと祥子が言うのを横目に、良一は荷物を運ぶかのように意識の無い文太を助手席から引きずり出す。

その時。

空が俄かに荒れ、突然暗くなった。突如吹き荒れる凄まじい暴風が二人を襲う。

「なんだ！？急に天気か！」

横殴りの雨も降り出した。立ってられないほどの風雨に、思わず二人はしゃがみこんだ。

すると、二人の目の前に、巨大な憤怒の顔が浮かんだ。それは空からゆっくり降りてきた。顔は真っ赤に燃え、瞳は黒い洞穴のようだ。ドレッド状の髪の毛は逆立っている。

「ひえええっ！」

良一の腰が抜けた。祥子は恐怖に意識を失った。それは、やがて人の形をなし、ゆっくりと良一のほうに歩いてきた。衣装は原始人のように肩がけの毛皮であり、手には長槍のような物を持っている。そして、ゆっくりと、良一の体を刺し貫いた。

「うぐえげごっ」

良一の意識も消えうせた。曇天の空に雷鳴が轟き、豪雨が降り注いでいた。やがて、意識を取り戻した文太は、事態が理解出来ず、警察に通報した。

明は、ふと目が覚めた。呼ばれた気がした。手元にあったはずの、アフリカ人形が無くなっていた。何かが、終わった気がした。それは、悲しいけれども、新しい光が差ししてくるような、不思議な希望を感じる予感でもあった。

やがて、警察に事情聴取され、全てを白状した二人は、罪を認め、執行猶予をもらった後、協議離婚して、それぞれ別の家へ引っ越していった。明は祖父とこの家に留まった。あの不思議なアフリカ人形は二度と見つからなかった。全ての事情を知らされた明には、はつきりと、あの人形が自分を守ってくれた、と言う事がわかったのだった。（終わり）

第二話 血の滲むカバン

今年、新入社員になったＯＬの久住舞は黙々と経費関係の書類を作成している。が、勤務中に、頭の中に思い浮かんでいるのはあのカバンの事ばかりだった。前々からずっと欲しいと思っていながらも、値段の高さに手が出ず、預金通帳と睨めっこしながら、買えずにいたカバンが、帰宅途中の中古ブランド店で偶然見つかったのだ。ルイ・トルビンと言う有名ブランドの肩下げカバンは持っているだけでステータスなのだが、今年から働き出してまだ数ヶ月の舞のボーナスは雀の涙だし、もうしばらくは、と諦めていた矢先だった。仕事終わりに、書店に立ち寄ろうとした時に、繁華街のさなかにちよこんと存在したその中古ブランド店のショーケースの中にそれはあった。あつ、欲しいカバンだ、と思い、値段票を見ると、なんとたったの二万円だった。安い、これなら買える、と思ったけれど、残念ながら今手元にそれだけのお金が無い。泣く泣く家路につき、明日には買おう、と決心した。そして、今日である。仕事もそぞろに手につかず、間違った入力処理をして上司にちよつと怒られ、終業と同時くらい勢いで、一人職場を去り、一目散にあのブランド店へ走った。あつてよ、売れてないでね、と願いながら息を切らせて目的地に着いた。ある。それは昨日と同じ姿でショーケースの中にあつた。息を整えて、店内に入る。狭い店内に、一人のオールドバックの眼鏡のおじさんが店番をしていた。

「あの、ショーケースの茶色のトルビンのカバンを売って欲しいのですけれども」

「はいはい、あれね。お待ちください」

おじさんは鍵をポケットから取り出して、店内からガラスケースを開き、早速商品を取り出す。

「これでいいね」

と言うと、さっさとレジに向かう。舞は、見せてもらいたい、と

一瞬思った。すると、おじさんはカバンを布で拭きながら、
「心配しなくても本物だよ、ほら」

と、正規商品に付属してある証明書を見せてくれた。舞は、それを見ながら、なら安心だ、と心を許し、財布を取り出した。綺麗に包んでもらい、代金を支払って店を出た。心が躍り、スキップでもしたいような気分だ。沸き起こる満足感を胸に舞は家へと戻ったのだった。

マンションの4階にある我が家に辿り着き、両親に見せたら、驚くと同時に、ま、人の使ったものだからね、などと言われ、ちよつと不愉快だったけれども、気を取り直し、今度は彼氏の慶太に写メールを送った。すると、破格だな、いい買い物したな、と言われ、非常に機嫌が良くなった舞は、お風呂に入った後、またしばらくカバンを眺めていた。すると、妙な事に気づいた。底面、表のひっくり返した面に、一箇所だけ変色している部分がある。それも、じっくり見ないと気づかないほどだが、茶褐色がもう少しだけ濃くなったような。なんとなく嫌な気分になったが、まあ底面だし、本来十数万円もするような高価なブランドものがたったの二万だったし、まあこれぐらいいいか、と思い、やがて眠くなって電気を消した。

眠りについた舞は夢を見た。おぞましい夢だった。映画の一シーンのように、俯瞰して状況が見える。シーンが何度も入れ替わる。ある男が部屋に入る。そこには一人の女性が眠っている。男は女に襲い掛かり、女は悲鳴を上げようとするが、猿ぐつわをかまされて声が出ない。男は女を乱暴に強姦した。そして、行為の後に胸に包丁を突き立てた。女は胸から鮮血を吹いて絶命した。男は、女の部屋を物色し、財布や金目になりそうなものを持って出て行った。ここで夢は終わった。舞は跳ね起きた。全身を汗でぐっしょりと濡らしていた。息までも荒い。夢か、夢でよかった、なんて現実感のある夢なの、と舞は心底震え上がった。まるで、私が体験したみたい。

時計を見ると深夜三時七分だった。ふと、気配と言うか、視線を感じた。顔を上げると、蒲団の横に悲しい白い人のようなもやがあった。舞にははつきりわかった。この人は、夢で男に殺された人だ。分かった瞬間に、その白い影に顔が浮かび上がった。舞は絶叫し、気を失った。

「本当なのか、夢の続きじゃないのか」

舞の彼氏、慶太は驚きと戸惑いを隠せずにそう言った。舞は強いかぶりを振った。あれは夢なんかじゃない、と。その膝には、あのカバンが置かれている。

「しかも、毎晩同じ時間に目が覚めるの。決まって三時七分」

「それも言ってたな。とりあえず三日も続けば参ってくるよな」

あの日以来、毎日同じ夢を見て、同じ時間に目覚め、同じようにあの彼女が横にいるのだと言う。

「何かしゃべってこないの」

「何も。悲しそうに見つめてくるだけ」

「考えられるのは、そのカバンの持ち主だった、ってことだな。そして、夢が真実なら、殺されて成仏できない、ってどこか」

「あのお店に行けば、売った人のことがわかるかもしれない」

「よし、行ってみつか」

そして、二人は入っていた喫茶店を出て、土曜日の午後の都心を歩いた。太陽の下では、恐怖は余り感じない。でも、こんな毎日が続くのはたまらない。何とかしなければ。目的の店に着いた。が、残念な事に閉まっていた。

「閉まってやがるぞ？土曜日なんて絶好の稼ぎ日和じゃねーか」

慶太は疑問に思ったが、閉まっているものは仕方ない。二人は次の考えを練った。そして、今日はそのカバンを持って、一人暮らしをしている慶太の家に泊まる事にした。

「俺は頑張って起きてるから、舞は安心して寝ろ。三時七分までは絶対に起きてるからな」

「ありがとう、頑張つて起きててね、私だけ寝てごめんね」

そして、舞だけが蒲団に入り、慶太は徹夜の覚悟でまなじりを決し、ねじり鉢巻をして、テレビをずっと見ていた。その間も色々考える。警察に行くのも手だ、だが、物証がこのカバン一個で、夢で見ただけの幽霊を見たただので、捜査に動いてくれるとは思えない。その前に、一切確証が無い段階だ。どうしたものか……。二時過ぎか。さすがに少し眠いな。横を見ると、舞は優しい寝息をたてて眠っている。あのカバンに目をやる。普通のカバンだ。洗面所に行つて顔を洗つてくる。眠気が覚める。と、思うのもつかの間、急に電気が消えた。なんだ！？と思い、リモコンで電気をつける。つかない。何故だ。時計を見る。三時を回っている。舞が声を上げ始めた。汗がすごい。うー、うーんと言つて唸っている。一体何が起こっているんだ、と慶太が戸惑っていると、舞が目を覚ました。同時に、カバンの置いてある場所の後ろから、白い影が、すうつと立ち上がってきた。言葉を失い、抱き合う二人。影は、そのままそこにいる。慶太は、思い切つて声をかけた。

「ど、どうすればいいんだ、あんたを殺した相手を、み、見つければいいのか」

白い影が揺らめいた。そして、顔かたちがはっきりと形を作った。若い。舞と変わらないくらいだ。清楚な顔立ちだが、例えようもない悲しい表情をしている。

ほかにも……。犠牲者が出る前に……。

と、二人には聞こえた。途端に、白い影が揺らめいて消えた。時間は、やはり三時七分だった。

警察には頼りようが無い。俺達でなんとかするしかない。そう決意した二人は、翌日に今度こそ開いていた中古ブランドショップに駆け込み、一切合切の事情を説明し、協力を求めた。店主のオール

バックのおじさんは最初はきょとんとしていたが、切々と事情を話すと、信じられないと言う顔をして、顧客情報を無闇に公開できない、と言い張ったが、二人の剣幕と、教えないとおっさんの枕元にも出るぞ、との脅迫に屈し、カバンの売買主の住所氏名を教えてくれた。

「後は、こっそり顔さえ見れば」

「顔が分かるのか」

「何度も夢で見たわ」

「じゃあ行こう。この住所ならそう遠くない」

そして二人は電車を乗り継ぎ、海に近い住宅街へとやって来た。

住所どおりの場所には、安普請の家具つきアパートがあった。

「ここか。さて、どうやって顔を見るか。よし、俺が新聞屋の勧誘のふりするから、舞は通行人の振りして見るんだ」

「わかった」

慶太はその住所の呼び鈴を押した。佐川急便でーすなんて言っている。扉が開いた。慶太が目で合図する。舞はゆっくり歩いた。男が出てきた。

「毎朝新聞なんすけど、取ってくれませんか」

「いらん」

とだけ言って、ドアを閉じようとする。舞は、その瞬間、その男の顔を凝視した。コイツだ。確信した。ドアは閉じられた。

「どうだった・・・・・・？」

慶太が聞いた。舞は、大きく頷いて、間違いなくアイツだ、と答えた。そこで、二人はふと顔を見合わせた。ここまではいいが、どうやって警察に通報すればいいんだろう？

「夢で見た殺人犯はコイツです！なんて言っても取り合ってもらえないよな」

「このカバンを持っていけば指紋とかがついてるかも」

「その理由があいまいだからな、取り合ってもらえない可能性大だ」
慶太は黙考した。やがて決心した。

「この方法しかない。危険だし、手間もかかるが」

「ど、どうするの？」

慶太は息を吸い込んで、自分に言い聞かせるように言った。

「アイツを監視して、次の犯行に出る時になんとかする」

「え！？相手は殺人犯よ！危険よ」

「だが、それ以外には無い。安心しろ、俺は柔道二段だ」

と、慶太は力こぶを作った。大学で鍛えた腕だ、ナント力出来るだろう、と思っていた。

その日以降、慶太は中古のボロワゴンRで監視を始めた。奴の家の死角に車を止め、中から見張る。犯行は深夜限定とみなし、夜十二時から朝の五時まで見張る。昼夜逆転だが、元々不良大学生なので大して苦にならない。しかも幸いな事に、奥まった場所にアパートが建っているのだ、どこかに行く時は必ず慶太の車の止めてある一本道の前を通らなくてはならない。人が前を通れば絶対に気付く。そして、その日以降一つ変化があった。それは、彼女が舞を起こさなくなったことだ。それはそれで一安心なのだが、やはりこの問題は解決しなくてはならない。五日目、その晩は舞も来た。足手まといになる、と慶太が言っても舞は聞かない。私のためなんだから、と強引についてきた。

「大丈夫かな。実際に動き出してもお前はついてくるなよ」

「わかってるよ」

夜も更けてきて、郊外にあるこの街はしんと静まり返っている。

夜がいつもより暗いのは月も星も一切見えないせいだ。

「今日あたり何かするかもな」

と慶太が言った瞬間息を呑んだ。舞が外を見ると、なんとあの男が歩いている。ただならぬ表情をしている。黒尽くめの服といい、極めて怪しい。通り過ぎさせておいて、慶太はそつとドアを開けた。手には用心のための特殊警棒を握り締めている。

「舞は残っている。絶対に出るな」

と堅く命じて車に残し、慶太は足音を抑えて尾行を始めた。男の足取りは思ったより早い。何かを欲しがる風でもある。迷わずに一直線に目的地に向かっていているようだ。振り向くなよー、と慶太は願った。幸い、尾行者がいるなどとは思っても寄らないらしく、ひたすら歩いている。昔呼んだ少年探偵シリーズを思い出すぜ、と慶太は背筋が震えた。しかも相手はおそろくの殺人犯だ。その内、男はある団地内に入っていた。慶太は時計を見た。一時半。こんな真夜中に人の家を訪問するわけが無い。決まりだ。手の特殊警棒を握り締める。きつと、鍵を無理やり開けて家に入るに違いない。その瞬間に不意打ちを食らわせて失神させてやる。慶太はますます慎重に後を追った。暗がりの黒服は見分けにくい。階段を昇った。絶対に足音を立てられない。しかし、余りに慎重すぎたため、見失うハメになってしまった。まずいぞ、どこだ。必死に暗闇に目を凝らしていた。ある家の前で鍵穴に何かを差し込んでいる。猶予は無い。慶太は特殊警棒を片手に突っ込んだ。

「おおらあー！」

わざと大声を出した。近所の住民に気付いてもらうためだ。だが、それが逆効果を生み、相手に身構えさせてしまった。振りこんだ一撃はかわされ、逆に体当たりを食らった。同時に、右の拳が飛んできた。こいつ、強い！

車の中で待っている、と言われた舞だが、何か嫌な予感がしてしょうがない。慶太に何か起こるんじゃないか、いても立ってもいられず、車を飛び出した。かすか遠くに慶太が見える。でも、とある場所で見失ってしまった。たぶんこの団地内のどこかにいると思うんだけど。その時、舞の後ろから優しい風が通り抜けた。前を白い影が過ぎていく。あなたは！と舞が思った瞬間、手招きされた。急いでついてゆく。

頬を殴打された慶太は、必死に相手に掴みかかった。掴めばなん

とかなる。また、何回か顔を殴られたが、巴投げの要領で二人同時に後ろに転がった。意識が朦朧とするが、本能で闘った。腕を掴み、捻ろうとした。だが相手のほうが強く、腕はずされ、頭を何度もコンクリートの通路に叩きつけられた。意識が遠のく、これまでか・
・・・・と慶太は思った。ふと、気付くと、攻撃が止んでいる。視点が定まると、そこにいたのは鉄パイプを握りしめた舞だった。そのパイプを捨てて寄り添ってくる。

「大丈夫！？嫌な予感がしたから来たのよ」

「ああ、なんとか大ジヨブだな。いてて、散々やられちゃった」

「もう大丈夫よ。思いつきり頭ひっぱたいてやったから、伸びてるわ」

「へっ、俺やかお前のほうが強いんじゃないの」

言いながら慶太はゆっくり立ち上がった。見ると、確かに後ろで黒服の男が気を失っている。その時、騒ぎに目を覚ましたのだろう、若い女性の住人がこわごわと顔を出した。慶太はその人の顔を見て悟った。やはり美人で一人暮らしのを狙ってやがったか、と。事情を説明し、110番してもらった。

「今から警察署で一晩過ごすことになるぞ」

「いいよ別に。あの人の無念もこれで少しは・・・」

その時、二人のそばからまた優しい風が吹きぬけ、天に向かって昇っていった。

ありがとう

と言う声が聞こえた気がした。二人には実感できた。あの人、ようやく天国に行けるんだ、よかった、と。（終わり）

第三話 もう一人の自分

朝っぱらから敷き詰められたアスファルトを黒く降り注ぐ雨が濡らし続けている。真壁充は傘から滴る水滴が皮のカバンにかかって痛めないだろうか、と顔をしかめながら太った体を揺らして駅へと向かった。雨の日は自然憂鬱気味になる。黙々といつもの会社への通勤コースを辿っていると、前から急ぎ足の作業服の男がやってくる。右手に携帯を持ち、慌てている様子だ。前も見ずに歩いてくるので、充はぶつかりやしないだろうな、と思っていると、案の定傘と傘がぶつかった、はずだった。それどころか、人間同士もぶつかりかねない進路を取ってこられた。相手が前なんて見てもいなかったのがわかった。だが、不思議と、充の体には何の衝撃も来ず、男はそのまま去っていった。充はおかしい、と思った。どう考えても傘も体も当たったはず。妙な事もある、と思い、そのまま駅へ向かった。

駅に着き、いつものように売店へ行き、スポーツ新聞を購入しようとした。今日もなかなかの人ばかりだ。百二十円用意して、新聞を手にとって、代金を渡そうとした。が、店員のおばさんの反応が一切ない。無視されている。

「おばちゃん、スポニチもらうよ」

と声をかけてもこちらを見もしない。腹が立ったので、代金を払わずに持って行ってやるうか、と思ったが、さすがに良心が咎めるので、代金をおばちゃんの前に置いて、そのまま去った。なんなんだ、と思いながら、通勤ラッシュのすし詰めの電車に乗り込んだ。充はすぐに異変に気づき、絶叫した。人が、自分を透けて通っている！これはなんなんだ、と充は驚愕し、自分で自分の体を触ってみる。無い。感覚が無い。馬鹿な！今朝、ほんのさっきまでスーツを着たり歯を磨いたりしたじゃないか。扉のガラスを見ると、まだ自

分は写つてはいる。しかし、周りの誰にも見えないし、触られもしない。力が抜け、持っていたスポーツ新聞が落ちた。拾う気もなく、

「お？」

などと言いながら、後ろの中年サラリーマンがそれを拾い、苦勞して体をねじって拾い、広げて読み始めた。俺の手を離れた物は見えるようになるのか？充は混乱しながら、ともかくいつもの駅で降りて、会社に向かう。しかし、この調子では、入社しても誰にも気づかれないのでは、と思う。途中にあるベンチに座り、手帳に字を書いてみる。書ける。ならば、事情を説明し、と言っても何を説明したらいいのかわからないが、ともかく出勤した事だけは伝えねば。タイムカードも通せる事は通せるのかもしれない。そう思い、自分の会社の入っているオフィスビルのエレベーターに乗った。案の定、誰も気づいていくれない。同僚がいるが、気づいてくれぬ。悶々としながら、九階で降りる。そこに充の勤める中堅商社の支店があるのだが、入ってすぐのところで再び驚き、卒倒した。な、なんと自分のデスクのところに自分がいる。あ、あれは、間違いなく俺だ。自分を客観的に見ることで自分が、これほどの恐怖であるとは、充は知らなかった。その時、デスクのほうの偽充と目が合った。偽充はニタァーっと笑った。充は気を失った。

気がつくと、夕焼けの公園のベンチに横になっていた。手荷物はなく、ただ出社した時の服装のままだった。腕を見て息が詰まる、うつすら地面が透けて見える。ここはどこだ？すぐにわかった。オフィスに近くだ。急いで支店へ戻ってみる。自動ドアが反応しない手を伸ばすとすり抜ける。と言う事は、体もすり抜けると言う事だ。エレベーターは人が乗るのを待ち、ようやく支店に戻る。いた。「俺」がいる。にこやかに隣の同僚と何か話している。

「おい！お前は誰だ！何者だ」

横に行つて大声で叫ぶ。何の反応もしない。正面に行つて睨み付

ける。が、偽充の視線は自分と合致せず、向こう側の壁を見ている。駄目だ。拉致があかない。ふと考えた。こいつが「俺」なら、どうせ放っておいてもあの家に戻ってくるはず。そう思った充は、いても意味のない支店を出て、先に家に帰っていることにした。何がどうなっているのか。何が起こっているのか。全く答えの出ない問いを一人繰り返した。

鍵を回す。朝出かけたまま、きちんと閉まっている。部屋の中もいつもどおり何も変わっていない。ふと気づいた。腹が減らない。喉が渴かない。幾らなんでも、半日飲まず食わずなのにこれもおかしい。ひょっとして、と充は嫌な予感に青ざめた。もう、俺は死んでいるのか？慌てて胸をまさぐる。全く感触がない。俺は、このまま消滅するのか？慄きながら、薄汚れたソファに腰を下ろす。テレビをつけてみる。普通についた。見るでもなく見ていると、鍵穴が開く音がする。やはり、ここへ帰ってくるんだな、なにせ「俺」なんだもんな。堂々と、偽充が入ってくる。充を見ても、何の反応も無い。

「よう俺。お前は一体どこから沸いてきたんだ？」

偽充は再び不気味な笑みを浮かべて、ガバアと口を開けて声をあげて笑った。

「ははは、偉そうに。この無能の怠け者が」

言いながら偽充は、上着を脱いでドレッサーにしまう。

「このスーツだって何年着たきりスズメだよ。アイロンも碌にかけない、クリーニングにも出さない」

偽充は続ける。

「今日だって期日の近いプロジェクトの事前調査、なんだあの進捗度は。間に合うと思ってるのかあれで」

充はハッとして胸が痛むのを感じた。

「一事が万事だ、適当に生きやがって。怠けるのはそんなに楽しいか！やるべき事をきちんとやれ！」

瞬間、偽充が青白い炎のように揺らめいた。その先端は天井にすら届くような長さだった。

「お前はもう必要ないんだ、後は『俺』が変わりにやる」

一言も言葉を発せない充に、偽充は大喝した。瞬間、充は力なく腰から崩れた。

あれから、何日ぐらいたったのだろう。充は、殆ど透明な魂だけになりながらも、まだこの世にいた。基本的に、偽充、いや、すでにアイツが本当の充なのだが――の近くにいた。アイツは、熱心に働いていた。自分とは全く違った。上司と相談し、同僚と協力し、お得意さんとの付き合いもしっかりこなしていた。それは、自分が夢見る理想の姿だった。聞くでもなく、アイツの評判も耳に入る。まるで生まれ変わったみたい。誰かと結婚でもするんじゃないか、あの熱心さは。俄然将来の支店長候補だ、最近痩せてきて格好よくなった、などという評判ばかりだ。それを透き通った陽炎のようになリさがり聞いている自分の情けなさ、不甲斐なさ。よく泣くようになった。もう二度と人間として生きる事は出来ないのか。嫌だ、神様、もう一度「充」に戻してくれ。次は、今度こそは頑張る。確かに不逞な怠け者サラリーマンだった、でも、それは間違っていた。神様、頼む、もう一回だけでいい、体を戻してくれっ……。ある夜も、夜中まで起きて書類整理をしていたアイツがようやく寝た後、こう考えて夜な夜な泣いていた。すると、急にアイツが目を開けて、こちらを向いている。

「戻りたいのか、俺に」

「も、戻りたいよ」

「足が短いだの、生来太る体質だ、だの、頭が悪い、だの不平不満だらけのこの『真壁充』にか？」

「そ、そうだ。それでもいいから戻りたいんだ！頼む、頼むよ、変わってくれよ！」

「戻ったら大変だぞ。俺の生活を見ていたろう」

「わかってる。でも、それが本来の俺のやるべきことだったんだ。逃げてた。言い訳してた。でも、それが間違いだったとお前が教えてくれた」

ベッドの偽充が柔和な笑顔を見せた。充の体が吸い込まれていく。再び、充は意識を取り戻した。それは、あの雨の降る朝だった。目の前から携帯片手に小走りで作業服の男が来る。傘がぶつかった。

「あ、すみません」

と、作業服の男が謝って去っていった。いいえ、こちらこそ、と返した充は、その男に負けない勢いで駅まで元気よく歩き出した。

（終わり）

第四話 首無しドライバー

富島邦明は改造を終えたばかりのスカイラインGT-Rをお気に入りの八甲山へと夜中に走らせていた。助手席にはツレの明津丈が乗っている。

「やっぱ違うわ。ギアチェンジもスムーズになったし、ノッキングが鬱陶しかったからな」

「今宵は余り車が走ってないな」

今二人が走る山道からは、これから上る道の様子を見上げる事が出来るのだが、もう夜半を越えているせいか、ほとんど車のヘッドライトが見えない。

「明日は休日なのに変だな、せっかく煽ってやろうと思ったのによ」

邦明は細かくギアチェンジをし、かなりの高速で表八甲を上っていく。丈もさすがにちよつと焦るほどだ。

「おい、さすがに飛ばしすぎでないか」

「へっ、馬鹿言うな、これぐらい余裕じゃ」

しかし、明らかにいつもよりも飛ばしている。しかも夜中は基本的に視界も利かないし、この手の山道には殆ど街灯やらのライトアップは無い。

「安月給つぎ込んでんだからな、お」

S字道路を飛ばす邦明らのGT-Rのヘッドライトが、前を行く一台の車を照らした。

「ほ、これはこれは」

丈が感嘆の声を漏らした。既に廃車になった古い型の黒の180SXが走っている。

「すげえ、今日びなかなかお目にかかれないスポーツカーですな、よし」

と言いつつ、邦明は速度を上げた。ケツにぴったり張り付いて、煽りまくる。

「このGT-R様の馬力と俺のテクの前にはゴミ同然だわな」

排気量からして段違いなので、競争をしても勝負にはならない二台なのだが、邦明は百も承知でわざと煽っているのだ。

「……前の車、いっこうに速度変えないな。かと言って、ここじゃ追い抜けないし」

丈がそう言うのと、邦明はタバコに火をつけながらパッシングをした。パッシングとは自動車のヘッドライトのハイビーム・ロービームを素速く切り替えることで、抗議の意味があり、この場合早く行けという煽りだが、全く効果がない。

「ま、その内追い抜かせてくれるだろ。にしても遅えな。一応スपीツカー乗りだろうがお前よ」

速度計を見ると30kmも出していない。必然的に超ノロノロ運転になる。

「あ、あそこでどくだろ」

山道にはたまに車線が広がっている部分がある。緊急事態などのために駐車できるスペースを作っているのだ。が、前の180SXはそこに止まらず、相変わらずの安全運転をしている。二人はカチンと来た。

「この野郎、このまま頂上まで行く気が、クソが」

「パッシングしまくってやれよ。見た感じ一人っばいし、降りてきたらシメてやろうぜ」

と言う事で散々パッシングしたりクラクションを鳴らしたりしたが、相手は何処吹く風で、とうとう頂上部のドライビンまで、邦明のGT-Rは法定速度遵守で登ることになってしまったのだった。「ちつきしょー、上についたら絶対に前に出て止めてやつからよ」

邦明が息巻いて、最後のカーブを上がった。すると、もう180SXの姿が見えない。

「あれ？いないぞ。どこ止まった？」

二人して辺りを見回すが、見当たらない。さっさと駐車したのかと、ついたパーキングエリアの車を全部チェックしたが、止まって

いない。

「急にスピード出して裏八甲のほうに行ったのかなあ」

「でも、それには最低でもこのパーキングエリア突き抜けないと駄目だぜ。あんなにピッタリくっついてたのに無理だろ」

二人は考え込んでしまった。が、いないものはもういい、と言う事で、降りて自動販売機でジュースを買った。

そして、二人でうだうだと恋話などして、今度は降りる事にした。帰りはガンガン行くぜ！」

「お手柔らかに頼むぞ」

丈は内心大丈夫かな、と思っていた。今宵の邦明は張り切りすぎている感じがする。案の定暴走、と言える走りで下り山道に突入する。すると、やがて目の前に一台の車が先行しているのが見える。

「ぎよ。まさかコイツ」

「その、まさか、つばいぞ。さつきとナンバーが一緒だ」

なんと行きしなの黒の180SXがまた眼前に現れた。速度も同じく安全運転、ドライバーの鏡そのものだ。

「なんじゃあこいつは。ああうぜえええ」

何回もクラクションを鳴らす、が、やはり知らん振りだ。

「コイツわざと俺らの前に現れてるのかもな」

ふと、丈はそんな気持ちがしてつぶやいた。

「ああ？なんでだよ」

邦明はイライラしてハンドルを殴りながら言った。

「いや、独り言と思ってくれ」

丈は前の車を凝視していた。何かがおかしい。けれども、何かおかしいのかわからない。前の180SXの車内は暗くて、中は何も見えない。やがて、安全運転の二台は、山を降りて、一般車道に合流する地点まであと少し、と言うところまで来た。

「今度こそ逃がさん。前に出て運転手のツラあ見てやる」

「おお、頼むわ」

今回はずつと視野に入れたままだから逃げられない。二車線の道

路に入った。猛然と邦明はギアを上げて、180SXを追い抜く。月夜の晩な上、この辺りは街灯がたくさんある。丈の側から追い抜いたので、すぐ横から見れる。丈は目を見開いて180SXを見た。同時に叫んだ。

「うおおっ！」

丈が悲鳴を上げた。邦明も睨みつけながら追い抜いたのだが、邦明も恐怖に驚き叫んだ。180SXの運転席には、確かに運転手は乗っていた。だが、なんとそのドライバーには首がない。首無しドライバーが運転する車が走っている！

邦明は思わず急ブレーキを踏んだ。真夜中の街にきしむブレーキ音が響く。180SXはそのまま彼方に走り去った。GT-Rを路肩に寄せて、二人は生きた心地もなく押し黙った。やがて、丈がようやく口を開く。

「会社の先輩に聞いた事があつたんだよ。八甲山には守り神がいるってな」

「何の話だ」

「詳しくは覚えてないけど、無茶する走り屋のこと守ってくれるんだってさ。自分は暴走して事故って死んじゃったらしいけど」

「さっきのがそうなのか……？確かに俺は今日は飛ばそうと思ってたな」

「だから、わざと前をゆっくり走ってくれたのかもしれない」

自然と二人は車を降りて、八甲山のほうへお辞儀した。それからゆっくりと運転し、家路へとついた。（終わり）

第五話 海に浮かぶ廃船

南太平洋へ向かう公海上、フィリピンの西側付近を遠洋漁業船の福増丸がゆったりと航海している。四月の暖かい気候のさなか、船長である国定太一をはじめとして、船員はみなリラックスしながら青い大海原の旅を楽しんでいた。福増丸はカツオの一本釣りのため、遙か南太平洋の漁獲場を目指して船を進めていた。大体二週間程度で目的地に着き、合計一月半程度は沖合いに出なければいけない。

「航海は極めて順調です、国定船長」

と、機関長である竹下卓が、見回りに運転室に来た国定健に報告する。そろそろ、夕方になる時間帯だが、空はオレンジ色に燃え、太陽は彼方の水平線に沈み行く時間帯だ。視界にはそれ以外には一面の海しか見えない。

「うむ、ここまで荒れる事もなく来ていて助かるね。慣れない若い衆は船酔いするからなあ」

「風が乾燥していますから、ここらでスコール辺りに洗われるかもしれないですね」

「程度によるが、少なからずうどいいシャワーだな」

と言つて、運転室の面々は笑った。福増丸は比較的新しい船なので、設備も特に痛んではないし、国定としてもこの航海には特に何の不安ももっていないかった。

「本当に釣れるかな、不安だよな」

「大丈夫だって、釣り糸垂らしてりゃ誰でも釣れるって言うてたからさ」

今年、新しく船乗りになった田代一太と新庄吾郎はそう言いながら釣具のチェックの作業をしていた。そろそろ夜がやってくる時間なので、天井の蛍光灯を引っ張った。船は穏やかで、揺れることも

ないので、船酔いに悩まされるのでは、と思っていた二人も思ったよりも元気にここまでやってきた。

「すげえ、星があんなに見えるぞ」

「この辺は空気が澄んでるんだなあ」

デッキに出た二人の目に満点の星空が写る。日本ではなかなかお目にかかれないほどの一面の星々に、二人はしばしそこに佇み眺めていると、飯の時間だぞう、と声をかけられて、二人は船内へと降りていった。

やがて、夜が更けていった。デッキでは交代制で見張りがつくことになっている。新人船乗りの田代と、ベテラン乗組員の五条克哉の二人で、双眼鏡片手に付近を見る。さらに、無線などの傍受も見なければならぬ。

「俺らが怠けるとタイタニック号みたいに真つ二つになるんだぜ」等と言って五条はわざと田代を脅かす。夜中になると眠くなるので、そこでわざとハッパをかけているわけだ。

「まさか、あんな真つ二つになったらシャレにならないっすね」

と、二人で笑っていると、強い風が吹いてきた。お、と五条が思うと同時に、波が荒れだした。

「おやあ。時化てくるのかな。雨が降るかもしれないぞ」

夜空には雲が立ち込めだした。先ほどまであれほどよく見えていた星空が影を潜める。

「ちよつと運転室行ってくるから、ここにいろんだぞ」

とだけ言って、五条は階段を降りていった。一人残された田代は不安げに海原を眺める。確かに波が高くなってきたようだ。黒くうねる海の模様に、なんとなく寒気を感じる。ふと、田代が視線をあげると、水平線の彼方に、何かがあるのが見える。双眼鏡で見ると、どうも船舶のようだ。再び戻ってきた五条に早速報告する。

「ほんとだな。段々こっちに近づいてきてるな。しかし、ぼろっつい船だな」

既に肉眼で捉えられるほど近づいてきているその船は、どうも一般の貨物船のようだ。一直線にこちらに向かってきている。

「おいおい、このままじゃぶつからんないか？しょうがない、無線打つか」

五条は通信室に入り、ＨＺを設定してある無線機から、こちらの船名と、進路変更を依頼した。だが、返事はなく、窓から見えるその船は一行に進路を変えない。

どうしましょう？こちらで舵を切りますか？

運転室から連絡が入る。当然、運転室もあの船の存在に気づいているらしい。五条はお願いする、と頼んだ。どうすべきか。船長に話すべきか。五条が逡巡している間にも、あの古びた貨物船はドンと近づき、もう５００ｍと離れていない場所にいる。無線機が壊れているのかもしれないし、視界も効いていないのかも、と判断し、五条と田代は照明弾を空に撃った。同時に、田代は船長室に走った。とにかく、舵を切っても、進路を変えても、あの貨物船は一直線に福増丸めがけてやってくるのだ。五条は冷や汗をかきはじめた。海賊船かもしれない。しかし、カツオ漁船を襲っても、まだこっちは一匹も釣ってないんだぜ。と思っっていると、船長や機関長、みな異変を聞いて寝巻きでデッキへ上がってきた。

「国旗が掲揚してある。なんと！日本国旗じゃないか」

国定は、もはや２００ｍと離れていない貨物船のマストに翻る日章旗を見た。同時に、強い雨が降り出した。既にほぼ全員がデッキに上がってき、迫り来る不審船になす事もなく立ち尽くしている。

「もつと速度を上げろ！回避するんだ」

機関長の竹下が運転室に叫んだ。が、いかんせん、相手のほうが速度が速い。追いつかれるのは間違いないが、何が目的なんだ？国定は万が一のために、乗組員全員に救命胴衣を着させ、救命ボートの準備をさせた。

「海賊船かも知れん。旗はカモフラージュか」

「しかし、見てくれはただの貨物船ですね．．．．．なんだ!？」
目前に迫り来る貨物船が、角度を変えて、福増丸に併走し始めた。
そのそばに、チラチラと炎のような物が見える。

「鬼火か．．．．．」

国定は息を呑んだ。その時、ガクンと船体が揺れた。みるみる福増丸のノット数が落ちる。

「どうなってる!」

「エンジンが動きません!」

やがて、福増丸は完全に停止してしまった。そして、不審船も同じく止まった。目と鼻の先に見える不審船の周りに、大小の無数の人だまが浮かんでいる。そして、デッキ部分に、次々と人影が現れだした。

「ぐ、軍服．．．．．」

国定だけがかろうじて声を発した。後の乗組員は、生きた心地もなく硬直していた。次々とデッキに整列する兵隊達は、みな一様に軍服を着込み、中にはハチマキやたすきがけをしている兵もいる。彼らは、整列した後、微笑んでいるような、それでいてとても物悲しい表情で国定たちを見つめた。国定も、竹下も、乗組員達も、全員知らぬ間に涙を流していた。彼らにはわかったのだ、兵隊達が、過去の戦争で亡くなった人たちのだと。思わず田代が手を合わせて念仏を唱えた。何人かも続いた。国定は、感極まって頭を下げる。すると、貨物船上の兵隊達数十人が一斉に敬礼を返した。乗組員全員も頭を下げて祈った。どうか安らかに成仏してください、と。急に雨が止んだ。国定がはつとすると、同時に貨物船は姿を完全に消し、そこには静かな海だけがあつた。国定たちはしばし呆然と立ち尽くしていたが、改めて彼らに深い祈りを捧げた。誰も口を開かなかった。ある船員が果物を持ってきて海に投げ入れた。他の船員もそれぞれ食べ物や酒などを海へ投じた。国定船長は、はるばる日本から南洋の海へ来た自分達に、ご先祖様が会いに来てくれたのだな、

と思い、かさねて哀悼の意を捧げ、再び福増丸を走らせ始めたのだ
った。（終わり）

作者より 太平洋戦争末期になると、軍艦が不足してきたので、兵
隊を戦地に送り込むために、民間の貨物船や商船も多数増援に使わ
れました。その多くが、護衛もなく、米軍の潜水艦によつて虚しく
撃沈され、太平洋の海に沈んでいきました。過去にそのような悲劇
があつた事を、どうか読者の皆さんも忘れないでください。

第六話 終わらないデジャブ

保田実は大学を中退した後、ともに就職も出来ず、バイトを転々としていた。そんなつまらない日々を過ごしつつ、ある日も安いバーで同じような境遇の友人と安酒を呷っていると、声をかけてくる相手がいる。誰だ？と見ると、中学の同級生だった黒木剛という奴だった。聞いた話ではどこかの組に入った、という奴で、なんかヤヴァいのに会っちまったな、と思った。髪の毛は茶髪でオールバック、全身から香水の匂いをさせている。が、態度は柔らかかった。

「久しぶりやのう。最近どうしとんや」

「おひさし。職も見つからずにバイトでぶらぶらつて有様」

そう言つと、黒木はちよつと眉を動かした。そして、おもむろにまあ一緒に飲もうや、久々の再会だし、と言ふ。もう一人の連れも全身黒尽くめでちつとも仲良くしたいと思えない風貌なのだが、断るにも断れず、実ともう一人は計四人でしばらく世間話などしながら飲んだ。

「ここは払うからさ、また遊ぼうや」

と、黒木はさつさと払いを済ませ、連絡先だけ交換して、実は家に帰った。ま、大丈夫か、とその時は思っていた。

後日、また飲もうと言ふ話になって、やることも無い実は誘われるままついていった。今日は二人きりで、女の子が横に座ってくれるような店に連れて行かれた。お金持つてない、と言つと、アホ、俺がはらうわい、と言つて連れて行かれた。2時間も飲んで、綺麗な子に勾をしてもらい、実は気持ちよくなっていた。そして、その後は黒木のマンションへ誘われた。まだ遅くないので着いていくと、急に真面目な顔でこんな事を言い出した。

「でな、今実は仕事無いんだろ、実はな、やってほしい仕事がある

んや。報酬はばつちりやぞ」

「え、何か求人があるんか」

「そこまでええもんやない、歩合制みたいなもんやけどな、実は今日本車は海外ですごい需要があるんや」

「そうなの」

「ビッグ3って知ってるか。アメリカの大きな自動車会社がみんなピンチなんや。それで日本車の人気があがっとる」

黒木は煙草の煙を吐きながら言う。

「でな、俺らは車を輸出して稼ごうとしてる。協力してくれるか？」

「いいよ、それで、何をすればいいん？営業？」

「違う、運転手や。手に入れた車を特定の場所に運んでほしいだけや。夜中になるんやけど、一台につき二万円払う。悪うないやろ」

確かに、悪くない。しかし、恐らく大阪から北海道まで、とかだと聞くと、そうじゃない、と言う。

「大阪のある港の貨物船に積んでくれたらええんや、遠くない。でな」

黒木が急にドスの効いた声で言う。

「その車つちゅうのは頂き物なんや、わかるな」

「い、いただきものって、盗むんか」

「せや、心配せんでも、もう一人とコンビや。直結だの鍵開けだのはソイツがやる。お前は見張りと運転。なんも心配いらん。」

心配もクソも思いつきり犯罪やないか、と実は思った。が、黒木の怖い顔を見ると、震えて断れない。

「大丈夫や、このシノギで捕まった奴は今まで一人もおらんから」
などと言われ、実は遂に承諾してしまったのだった。

三日後の夜中一時、府内の某駅前ロータリーで言われた場所で実が待っていると、話されていた白の力ローラ2がやってきた。乗り込んで、運転手に一応挨拶した。小柄で髪の薄い男だった。無愛想に返事し、すぐ車を発進させる。どこへ行くかも聞いていない。や

がて、新興住宅街の大きなマンションが立ち並ぶ場所へ着いた。そのうちの一つのマンションの地下駐車場にもぐってゆく。奥の一箇所に停めた。

「降りて見張れ」

小男に言われ、辺りを見渡す。このレベルのマンションなら管理人がいるかもしれない。小男は黒いＣクラスベントツの鍵穴に何か入れて、あっという間にドアを開けた。次にハンドルの下の部分に何かしている。恐ろしく早い。

「よし、乗れ。場所はわかってるな」

もう終わったのか。よ、よし、後はコイツで指定された。湾に停泊してる貨物船に乗ればいいんだろ、実はそう心の中で繰り返しながら、メルセデス・ベントツに乗り込み、そのまま勢いよくアクセルを踏んだ。しかし、全く前を見ていなかった。出た通路の先には、深夜に帰宅して、自分の部屋に帰ろうとしているサラリーマンがいた。うわっ、と思った瞬間はもう遅かった。急激にブレーキを踏んだものの、手遅れで、車体に鈍い感触が伝わった。思わず目を閉じた。そして、再び目を開けると、フロントガラスに顔から突っ込んで血まみれのその男の顔があった。

「うぎゃわああああー」

地下の駐車場に実の絶叫が響き渡った。

ふと、意識が戻った。場所は？まだマンションの地下だ。実は何故か車から降りている。横では、何故かまたあの小男がベントツを直結する作業を行っている。なんだ？今のは幻覚だったのか？腕時計を見る。深夜一時十六分。

「よし、乗れ。場所はわかってるな」

小男が全く同じ台詞を言う。既視感、デジャブだ。実はとまどいながら、今度はゆっくりとベントツを走らせる。前をあの手でサラリーマンが行くのが見えた。よ、よし、今度は大丈夫だ。さっきのは予知夢みたいなものか？国道に出た実はまだ納得の行かないまま、車を

走らせた。その時、対向車線から突然大型トラックが突っ込んできた。避けられない！慌ててハンドルを左に切ったが、切ったほうにトラックが正面から突っ込んできた。

「うぐおおおっ！」

実はトラックの正面のバンパーに押しつぶされた。

また、意識が戻った。まただ、またか。腕時計を見た。一時十六分。実はものすごい汗をかいている。小男はその様子には全く気づかないで同じ作業をしている。もう嫌だ、逃げよう。実はそつとそこを離れた。が、しかし、すぐ見つかった。

「お前よう、今更逃げられると思ってんのか？」

小男は背中からサバイバルナイフを取り出し、一気に実の首に突き立てた。エグウウツ、と声にならぬ声を出して、実は失神した。

そして、まただ。一時十六分だ！お、俺はどうなるんだ。もう逃げられないのか。逃げても殺される、車に乗っても殺すか殺されるかだ。誰か、誰か助けてくれ！この無限のデジャブから抜けさせてくれーっ！（終わり）

第七話 呪われたマンション

小学校5年生の下山由紀は、今度引越してきた新築のマンションをとても気に入っていた。念願の自分の部屋も手に入ったし、壁もドアもみな新品で、おまけにフロア暖房などもついていて快適なものだったからだ。ただ、住みなれた街や、友達と離ればなれになるのはとても辛かったけども、父と母はやっと自分の家が持てる、と喜んでいたし、それなら仕方ない、と諦めることも出来た。初めて下見に来たときは、その規模の大きさにびっくりした。二十五階建てで、映画に出てくるみたいな噴水の出ている庭園があつて、周りにはライトアップなんかもしてあつて、由紀は目を見張っていたものだ。ただ、実際に購買予定の七階の部屋の中に入ってみて、ベランダから見た風景は少々不気味だった。鬱蒼とした森と、寂れた工場と空き地のようなものが見えたからだ。でも、両親はそんな事は気にせず、ダイニングがどうの、家具がどうのと言っていて、由紀は帰りの車の中でもそれは言い出せずじまいだった。

「ここに決めようと思うんだが、由紀はどうだった？」

と、父親の健太が聞いた。

「うん、別にいいよ」

「由紀ちゃんの部屋も用意できるし、転校する小学校も凄く近いし、ショッピングモールもホームセンターも真横だし、駅にもさほど遠くないし、本当にお買い得よねえ。5LDKで三千万円台なんてありえないわ」

と、母親の泰子は喜びを隠せない様子だ。それもそのはず、地価は相変わらずやたら高い都心部の郊外で、この立地条件でこの値段はまず考えられない。

「さっきの不動産屋さんが言うのは嘘じゃないだろうな。早く決めないとおつという間に完売しそうだな、よし、男は決断だ、あそこにしよう」

と言う流れで、由紀たち三人は、晴れて一週間前にこのセントラルホープパレスに転居してきたのだった。

夜半に、由紀は目が覚めた。寝る前にジュースを飲みすぎたらしい。起きだしてトイレに向かう。ようやく家の配置が頭に入ってきた頃だ。リビングに入ると、豆電球だけがつけてある。と、台所のほうで何かが動いたように見えた。由紀はそちらに目を凝らした。薄く白い煙のようなものが見える。なんだろう、と近づくと、それは突如人の形になった。由紀は思わずヒツと声を上げた。お爺さんが、悲しげにこちらに近づいてくる。

重い・・・・・・・・どいてくれ

と言いながらこちらに寄ってくる。由紀は絶叫し、隣接している両親の寝ている寝室へ転がるように駆け込んだ。もちろん二人とも何も知らずぐっすり眠っている。

「お母さん、起きて！変なお爺さんが家に入ってきてる！」

激しく揺すられて、康子が驚いて目を覚ます。

「何よ、由紀ちゃん、どうしたの？何があつたの？」

「リビングに怖いお爺さんがいるの！こっちに来る！」

その声を聞いて、同じく目を覚ましていた健太が真っ先に部屋を出た。

が、やがてうるんな顔をして戻ってきた。

「由紀、誰もいないよ？」

康子に抱きついて震えていた由紀は、さっきはいたの、白い顔で、凄く怖かった、と何度も繰り返した。そこで、健太は、

「そうか、でももうお父さんが起きたから逃げちゃったぞ。今日はここでお休み」

と言って、由紀の部屋から布団一式を持ってきた。夢の続きか何かで混乱したんだろう、と康子は思い、隣で添い寝した。その夜は

それで終わった。

次の夜は、康子が夜中に目が覚めてしまった。時計を見ると午前二時前だ。どうも喉が渴いたからみたい。ビールを飲みすぎたかしら、と寝室を出て、リビングの冷蔵庫からウーロン茶を出して飲んだ。ふと、後ろで何か物音が聞こえた。なにかしら、と振り向いて目を見張った。火の玉が飛んでいる。な、な、なに？と康子が声を出した瞬間、そこに赤ん坊を抱いた小さな女の子が現われた。由紀よりもさらに小さいその子は、康子に向かってこう言った。

邪魔だからあなた達は出て行ってちょうだい！

言ったと同時にその子と赤ん坊が同時にこちらをきつく睨んだ。その目は真っ赤に燃えさかっていた。康子はその場に失神した。

「そんな事……どうも信じられん」

朝、リビングに倒れていた康子を介抱した健太は、無事目覚めた康子に事情を聞いて眉をひそめた。

「嘘じゃないわ！真っ赤に燃えた顔に睨まれたのよ！とても怖くて気を失ったのよ」

横にはいつの間にか由紀も起きて来ていた。目の下にクマが出来ている。

「私、昨日は金縛りになったよ。それで、耳元で誰か男の人がずっとしゃべっているの。僕らはこのマンションの下敷きになって重たくてしょうがない、なんとかしてくれ、って繰り返し言うの。でも怖くは無かった」

健太は由紀の頭をなでて、そうか、怖かったね、でももう大丈夫だ、と言いながら、とその話が本当ならば、このマンションは墓地の上に立ててあるのか？と自問した。康子も顔色が真っ青だし、健太は今日は会社へ行くのを止めて、少し事情を調べてみる事にした。

康子に今日はゆっくりしてなさい、と言って寝室でもう一度寝かせ、由紀を学校へ送り出した後、健太はまず家のPCのネットを使って近辺の歴史を調べてみた。すると、確かに、このマンションの住所で、数年前にここが墓地であった事が分かった。さらに、匿名掲示板にだが、このような書き込みがあった。

○ ■ 不動産は本当にやる事が汚いと言つか恐れを知らぬと言つか。知ってるか？お前ら。

あそこは地上げは当たり前だし、それどころか霊園でも墓地でも何でも崩して更地にしまふ。

そこでそこにラブホだ高級マンションだ建てて、しかも元がただみたいなものだから破格の

値段であつという間に売っちまって大もうけさ。最近ならヨシトミ新興開発計画の一環のセント

ラルホープパレスがそうだな。あそこには古びた狭い墓地があつたんだけど、問答無用に縁者親族に

金掴ませて買い取りだ。中には関係者が見つからずそのままぶつ壊されたものもあるらしい。

ま、○ ■ 不動産なんてヤクザみたいなもんだからな、これ読んだ人は関わらないほうがいいぜ。

健太は愕然とした。まさに、販売元の不動産屋の名前だ。その瞬間、部屋にピシッという音が鳴り響いた。健太は思わず椅子を倒して立ち上がった。が、周りには誰もいない。安心して、ベランダのほうのガラス扉に目をやった。一瞬心臓が止まった。そして、腰が抜けてその場に尻餅をついた。10人ほどの老若男女が、七階のベランダの向こう側からこちらを見ているではないか！みな、土気色で、悲しい顔をしてこちらを見ている。健太は、恐怖の余り顔を引きつらせ、後ろずさつて、無理やり立ち上がり、思わず玄関から外にまで飛び出した。飛び出たと同時に、隣の家の扉も開き、専業主

婦の奥さんも顔を真っ青にして飛び出してきた。

「あ、も、もしや？」

「下山さん！あなたのベランダからも見えたのですか！」

しばらく二人はそこで息もつけずにいた。家の中の家内が心配だ。健太は、とにかく一度は戻ります、と言ってまた部屋の中に入った。幸い、康子は何も気づかずに眠っている。ベランダの外にも、もう誰もいない。健太は決心した。引っ越そう。死者の墓の上で暮らす事は出来ない、と。

こうして下山一家はそれから一週間もしないうちに、このマンションを解約し、新たな街へと引っ越していった。同じように、セントラルホープパレスの住人達は次々と引っ越していった。そして、広大なマンションに、今は殆ど人の影も無く、ただ風だけが通りぬけていく……………。(終わり)

第八話 古都に彷徨う亡魂

羽野渚^{なみの}は休日の喫茶店で、年末休暇を利用して、食品会社の同僚の向井望美と二人、どこかに旅行に行こう、と言う話をしていた。

「思いつきり古風な旅館にあえて行きたいな」

「ああ、あえてね、いいね、じゃあ京都か奈良で探そうか」

そこで二人は旅行代理店のパンフレットや、書店の旅行案内、さらに、インターネットで検索などをして、京都の市内中心に位置する「田和良屋」と言う由緒深い老舗の旅館に泊まりに行くことを決め、渚が予約を取り、無事二人分の予約を確保したのだった。

吹く風が頼に冷たくなる師走の終わりに、渚と望美は二人して新幹線に乗り、地元関東から遙々京都までやってきた。冬の京都はいかにも情緒深く、空はうつすらと曇っていたのだが、それもまた奥ゆかしさを感じさせる。二人は、まず旅館に荷物を置いて、少し休憩した後、都内巡りをする予定なので、まずは何処にも寄らず田和良屋へとまっすぐ向かった。

「ああ、ここよ、ここ。ネットで見たとおりの外観ね」

「う、そう？ イメージよりちよっとボロいわね、でもそれが老舗の醍醐味よね」

望美がうなる。確かに、ネットで見た画像よりも、建物自体がくすんでいる、と言う感じはする。

旅館内に入るとすぐに仲居さんが応対に出てきて、荷物を受け取ってくれる。愛想のいい人で、二人はすぐに自分達の部屋に辿り着いた。その部屋は「花咲の間」と言う名前で、渚が気に入ってここを指名したのだ。室内は書院造りの和室で、まず目に付くのが部屋の一角のガラス扉の向こうにある竹林の林だ。床の間の掛け軸は紫陽花だし、湯飲み茶碗もあやめ模様だし、壁の水差しには山茶花^{さざんか}が活けてあるし、二人はすっかりこの部屋が気に入った。

「すごいねえ。客が女性だからって気を使ってくれたのかな」

「どうだろう。部屋によって趣向が違うのかもね。出来れば他の部屋も見てみたいね」

と言いながら、用意されていた茶菓子などを食べて、少し休憩した後、二人は冬の京都の散策へと出かけたのだった。

日も暮れた頃田和良屋に戻り、夕食の日本料理のフルコースを楽しみ、日本酒などしたたかに飲んだ二人は、各個室に備えられている木造造りのお風呂に入る事にした。渚から、と言う事で、旅の疲れを癒すために、とゆつたりと湯に浸かる。全面板張りの浴室には、独特のお湯の匂いが広がり癒される。酔っている事もあって、このまま寝てしまいそう、とか思っていたら、何か動くものが目に入った。何かしら？虫？と目を凝らして天井を見上げると、そこに髪の毛ざんばらの口から血を流した顔があつた。厳しい顔で渚を睨んでいる。渚はつんざくような悲鳴を上げた。恐怖に両手で顔を閉じ、ずっと顔を上げられない。そこへ、悲鳴を聞いて望美が駆けつけた。「どうしたの！？ 大声上げて」

「のぞみい、う、上に男の顔が」

「え？・・・何も無いよ」

渚がこわごわ目を開けて天井を見ても何もいない。幻覚だったのかしら？

「長く入りすぎでのぼせたのよ。ホラ、交代交代」

とか言いながら、望美はさつさと服を脱ぎ始めている。そうか、気のせいかな、と渚も思い、風呂桶から体を出した。

望美も入浴を済ませた後、旅館探索をすることにした。田和良屋はかなり広い造りで、いかにも老舗的な伝統を感じさせるオブジェがたくさんあり、二人はデジカメであちこち撮影していた。望美が飾つてある坪を撮っていると、何かが写りこんだような気がする。気になって、デジカメの画像をモニターで確認すると、なんと男の

顔が写りこんでいる。

「い、いやあ。何これ、渚見てよこれ」

渚もモニターを見て震えた。これ、ひょっとしてさっきお風呂場で見た顔では？

「落ち武者みたいな顔だね、怖いわ」

「気持ち悪い。早く消去しちゃえ」

望美はすぐにその画像を消して、薄気味悪くなったので、二人は「花咲の間」に戻った。するともう蒲団がしかれてあったので、二人はそそくだと蒲団に潜り込み、さっきのことは忘れ、職場の事や恋愛の事を話し合った。そうこうしているうちに、二人は眠りについた。

胸が重い。望美は苦しくなって目が覚めた。覚めた瞬間、自分にまたがっている男と目が合った。息が詰まった。ざんばら髪の落ち武者が望美の上に乗って、しかも首を絞めてくる！望美はもがいた。必死に体を動かすが、金縛りにあっているようで動けない。渚！起きて！助けて！

渚も目を覚ました。隣の望美が激しい唸り声を上げている。どうしたんだろう。夢にうなされているのかな。真冬なのに汗が尋常ではない。起きているのか？

「望美、望美、大丈夫？」

だが、返事がない。眠っている。悪夢にうなされてるなら、いつそ起こしてあげたほうがいいか。それに、何かこの部屋の空気は妙だ。暖房を入れているはずなのに冷気が漂っている。

「望美！起きて！起きなさい！」

ふと、望美は目を覚ました。バネのように跳ね起き、呼吸は乱れ、汗は滴っている。横を見ると、渚がいる。思わず渚に抱きついた。「さっきの落ち武者に首を絞められてたの！殺されるかと思った

！ 息がでなかつたの！」

望美は恐怖に震えて泣き出した。渚は望美の首を見てぞっとした。そこにはくつきりと、締め付けられた後が赤く残っていた。二人は電気をつけ、フロントに電話して、誰かに来てもらう事にした。

「そうでございましたか。土地柄、未だに浮かばれぬもののふどもがたまに寄り付いてきますんや」

夜中にも関わらずやって来てくれた女将は、そう言いながら二人に護符のような物を渡し、お詫びを言った後、なにかお経のようなものをしばらく唱え、塩を撒いて、まずこれで今夜は大丈夫ですきに、と言って帰っていった。でも安心出来ない二人は、テレビをつけたまま、朝までまんじりともせずに過ごしたのだった。

翌朝も女将はやってきた。望美の首に冷却スプレーをかけながら、古都京都の歴史を淡々と語りだした。平安京以来、みかどのおわしますここは、幾度も幾度も戦乱に巻き込まれ、極めつけは室町時代の応仁の乱として、味方同士が裏切り殺し合い、もちろん京の民衆も巻き込まれ、襲われ、奪われ、犯され、殺され、さながら地獄絵図のような有様だったんだ。そして、菩提も弔ってもらえない無念の魂がいくつも生まれ、未だにこの街をさまよっておるんでしょうねえ、などと話した。二人は神妙にそれを聞いていた。そして、その日のうちに宿を払い、いくつかのお寺に御参りするたびに、戦乱の死者の冥福を祈り、旅を終え帰って行くのだった。（終わり）

第九話 死者からの電話

女子大生の安芸津美奈子はなつた携帯を手にとつて軽く舌打ちした。またコイツか。しつこいんだつてば。かけて来たのは二ヶ月ほど前にコンパで知り合つた環境NPOの職員だと言う野呂準之助と言う男。最初は明るそうでいい人の印象があつたので、二回ほど食事と言つたりしたのだが、蓋を開けてみると案外陰湿で根暗で、かつ傲慢なところが見え隠れするし、やたらお酒を飲め飲めと下心は見え見えだし、それで降余り相手にしないようにしていたら、この所毎日のようにメールや電話をしてくる。メールの文章も脅し口調になったり、哀願口調になったりで鬱陶しいことこの上ない。どうしたらいいんだろ。コンパを組んでくれた同じ女子大の中村良恵に経緯を話してみた。

「正直関わりたくないんだけど」

「あー、うん、どうにかしてみるよ。つか、メールでもう連絡しないで、つてはつきり言えば？」

「あ、それもそうだね、うん、そうするよ」

そして美奈子はその後、もう連絡しないでください、お付き合いするようなことは出来ません、とはつきりメールで伝えた。するとどうして、なぜ、俺のどこが気に障つたの、俺ら仲良かったじゃない、と怒涛のようにメールを送ってくる。また、電話も何回もかけてくる。全部無視し、電話もメールも着信拒否設定にした。もう安心だろ、と美奈子は思っていた。

ある夜、美奈子がアルバイトを終えて、駅から帰ろうとすると、どうも不審な予感がする。この胸騒ぎはなんだろ、と思い、用心深く歩いていると、美奈子の家のマンションの前に誰かが立っている。まさか、あれは。思わず角を曲がる。あれは、野呂ではないか。何で私の家がわかつたんだろ。美奈子は震えた。すると、誰かに

肩を叩かれた。

「美奈子、久しぶり、会いたかったよ」

「ヒッ。な、何故家が分かったの」

「人に教えてもらったんだよ、どうして僕の電話に出てくれないの」
夜の街灯に照らされた野呂の顔は青白く、表情に怒りが籠っている。美奈子は震え、たまたま通りがかったサラリーマンに

「た、助けて」

と声をかけた。サラリーマンは事情がわからないが、ともかく立ち止まった。すると、野呂がこんな事を言う。

「すいません、こいつ家出してた妹なんです」

言うなり美奈子の手を掴みどこかへ連れて行くこととする。美奈子は大声を出した。

「嘘よ！ コイツはストーカーです！警察を呼んでください！」

美奈子の声に、他の通行人もちらほら集まってきた。中の一人。体の大きな男性が、嫌がってるぞ、離してやれ、と言って野呂に近寄ってきた。

「く、くそう。覚えていろ」

と、捨て台詞を吐いて野呂は去っていった。美奈子は男性にお礼を言つて、逃げるように家へ走って帰った。

次の日、美奈子は両親と相談して、警察に相談に行った。すると、警察は、一回だけではストーカー規制法の適用はちよつと難しい、もう一回同じような事があればすぐに通報してください、なるべく一人で歩かないように、防犯ベルなどを携帯するように、などと注意するだけだった。美奈子は不安を感じ、しばらく不要な外出はしない事にした。しかし、幸いあれ以降何の音沙汰もないまま過ぎた。そんなある日、大学で良恵が声をかけてきた。

「美奈子、ちよつと言いくいことなんだけど……」

「何？ 改まつて」

「実はさ、野呂さんがさ、自殺したんだつて」

「え？マジで？」

美奈子は、安心したような、かつ、少し自責の念も感じた。理由は不明らしい。遺書には、生きるのに疲れました、とあったらしい。「でも、美奈子のせいとかじゃないよ。一応伝えなきゃ、と思ってもう心配は要らないよ」

と、良恵は微笑むのだが、美奈子は釈然としない感情を抱いたのだった。お葬式は？と聞くと、親族の密葬と言う形でもう終わったんだって、とのこと。一回ぐらいいは焼香に行くべきか、思ったが、遂にその機会はなかったのだった。

その話を聞いて数日後、美奈子の携帯が鳴った。番号は非通知だ。一瞬迷ったが、出る事にした。

「もしもし」

ノイズのような音がズー、ザーツつと小さく響いている。さらに、その音に被せて荘厳なクラシックのような音楽がなっている。電波がわるいのかしら、などと美奈子が思っている。

「ひ……………久しぶりだね……………」

とひび割れるような声が聞こえた。美奈子は一瞬それが誰の声かわからなかった。が、やがてそれが誰の声が分かった時、心底恐怖を覚えた。野呂の声だ。

「今……………何してるの……………」

美奈子は通話を切った。全身が震えている。死んだんじゃないかったの！？何故電話をかけてくれるの？ふと、ひよつとして、良恵が嘘の情報を伝えてきたのではないかと思い、即良恵に確認した。すると、嘘でもなんでもない、確実な話よ、と断言する。すると、今の電話は……………。美奈子は通話を切った。すると、また非通知でかかってくる。出てはいけない。美奈子は携帯を部屋のクツシヨンの下に隠し、ベッドに飛び込んで耳を塞いでいた。いつまでも鳴り止まないコール。美奈子は、ベッドから飛び出て電源ごと切った。すると、今度は家の電話が鳴っているのが聞こえた。まさか、

と思って、自分で出た。すると

「どうして出てくれないんだ．．．．．電話に出てくれないと．．．．．」

地獄の底から響いてくるような声に、息も出来ないでいる。出てくれないと？と美奈子が思った瞬間、後ろから肩を叩かれた。

「直接会いに来るよ」

後ろには口から血を流し全身真っ青の野呂が立っていた。美奈子は絶叫して失神した。（終わり）

第十話 深き呪いの淵から（長編）

「一体どうなっているんだ、多い、余りにも多すぎる」

四月の暖かな夜も更ける頃、県内最大の神菜川総合病院の救急治療科に所属する牧野辰也は、幾つもの自分のデスクに置いてある分厚いカルテのコピーを見ながら唸っている。この二週間で、県内からこの病院に運ばれてきた高血圧性脳内出血による救急患者はなんと千三百二十六名、この圧倒的な量は殆ど人為的なものすら感じさせる。一枚ずつめくる。四十三歳、二十一歳、酷い人はなんと十七歳だ。統計上も、脳出血による死者は五十歳代から上がほとんどで、もちろん稀に若年層にも患者は出るが、この千三百二十六人のうち八十四人が二十歳前後と言うのは割合が高すぎる。そして、共通の特徴がある。机の前に張られたレントゲン写真を見る。どの患者も口腔からほんの真上あたりで出血し、脳幹付近の血管が破裂してしまっている。この部位では手術も何も、ほぼ即死に至ってしまう。

牧野は、口を真一文字に結んで椅子から立ち上がる。この所の大量の急患のせいで、ほとんど眠れていない。もつとも、運ばれた患者はすでに手遅れなので、なんらの施術も行っていないのだが。窓の外の暗闇が途轍もなく黒ずんで見える。三十台の牧野の頭髮に白いものが増えてきている。牧野は、何か表現できない怖ろしさを感じ、いつもぶら下げている胸の鬼子母神のお守りをそつとなでた。ふと、視線がCTスキャンで撮影された一枚の脳の断面写真に止まる。なんだこれ？牧野は首をかしげた。一人の患者の溢血が、字を象^{かたど}っているように見えたからだ。「怨」と読めるような気がして、ぞつとした。偶然だろうが、不気味だ……。牧野は背後のライトの電源を落とした。

「あー、夜勤は本当に退屈だあな」

百貨店の夜間警備員の倉沢泰一はそう言いながら防災センターの

中の休憩室の椅子に座り込んだ。防災センターの中にはもう一人の警備員が詰めているだけで、しんとしている。夜の時間は長く、時計は進まない。99.9%何も起こらない夜勤では気も張らないし、眠い事この上ない。泰一は買ったばかりのマイルドセブンの封をあけ、一本取り出して火をつけた。ふう。後三時間か……。泰一はのんびり背中を伸ばした。すると、突然目の前が赤、黄、黒に明滅し、喉に焼け串を突っ込まれたような痛みを感じた。息ができない。椅子から転げ落ち、床を転がった。視界が利かなくなり、目の前が真っ暗になった。その時、泰一の頭の中にかすかな声が響いた。

滅びてしまえ

泰一は意識を失い、もう一人の待機警備員が大慌てで119番に通報し、救急車を呼んだ。

「この二週間で千三百二十七人だと？何だこれは……………」

神菜川県警察署長を務める小石川仁は首をひねった。本来、死亡者の計上は、犯罪性の有無は関係なく、役所を通じ、法務省に上がつていくもののだが、余りの量に不審を感じた地方法務局の戸籍係である宗政亮が、資料を携えて、神菜川県警へ赴いてきたのだ。

「全て死因が同じ、高血圧性脳内出血なのです。これはありえない。しかも神菜川県内だけの数字です」

「あなたは、何らかの犯罪性を感じて、ここへ来られたのですか？」
小石川はまだ事態を飲み込めない。蓄えた口ひげをしきりにこすり、目を細める。

「私は医学に疎いので、この一種の脳出血が、何に起因するかも知りません。ですが、素人なりに勝手な想像をしますと、何か新種のウイルスか何かが行りだしているのでは。これだけの大量死、他には理由が思いつきません。この後、検疫所にも行こうと思っています」

ます」

言いながら、宗政は持ってきた資料に手を沿え、理知的な眼鏡を直しながら言った。

「死者の分布図を作成していただきたいのです」

「わかりました。誰かにやらせましょう。場合によっては域内封鎖など、大変な事態になりますな。しかし、脳出血は外部からの病原菌などで起こるものなのだろうか・・・・・・？」

「ネットで軽く調べた程度ではならないようです。急患を受け入れている病院に聞き込みなどもする必要があるのでしょう」

「まだ政府はこの状態を把握してないのでしょうな」

「おそらく。マスコミもまだ何も知らないようで、この報道は一切目にしません」

宗政はしかし、悪い予感に打ち震えていた。ただ事ではない何かが起こっているのだと、本能が告げていた。そして、胸のきしみも覚えていた。実は、妻の父親も二週間前に脳出血で倒れ、他界していたのだ。その時は致し方ない、病だけは勝てないものもある、と納得していたが、その後の死亡届に添付される診断書を見ると、どれもこれも同じ病名ばかりなので、遂に今日腰を上げ、上司にも了解を得て、まず県警へと赴いたのだが、何か掴んでいるかとの期待は外れ、署長すらとまどっているばかりなのであった。小石川に別れを告げ、宗政は県内の検疫所へも足を運んだ。が、やはりなんらかの情報はなく、逆に情報提供を依頼される始末であった。ちなみに、脳出血を誘引するようなウイルスや病原菌はこれまでに発見されたことはない、とのことだった。

「と言う事で、頼む。君が一番適任だと思うんだ」

署長室に呼ばれた、県警刑事一課所属の幸田明弘は少し戸惑った。

「とりあえず死亡者の分布図作成をすればよろしいのですか？」

「そうだ。あと、うーん、十人ほどサンプルとして、死亡時の状態を調べて報告して欲しい」

「……………わかりました。その程度ならすぐに出来ますが」

「頼む。急いで欲しい。何が進行しているのかはわからないが、何かおぞましい予感がしてくるんだ」

「数が千人単位ですものね。私も何かヘンだと思います」

長年刑事をやっていると、第六感のようなものが発達してくる。

現在四十歳を迎えた幸田のそれは、この事件を「クロ」だと告げている。何者かが、何らかの力が背後にある。幸田は長い髪の毛をなびかせ、署長室を飛び出した。急がねばならぬ。

地方法務局の戸籍係の宗政は、検疫所を出た後、県内でもっとも大きな神菜川総合病院を訪ねた。ここが書いた診断書が多数あったのを覚えていたからだ。急な訪問を詫び、どなたか急患担当の医師で今時間がある方はおられないか、と受付でお願いすると、少しすると、体格のよい一人の医師に会うことができた。年齢は同じ程度か。目の下のクマを見る限り、やはり一連の患者の対応に疲れているのか。宗政は丁寧にこの病院へ来た経緯を話した。すると、牧野は何度も頷いた。

「私も全く同じ思いです。不信任は募るばかりです」

「多いですね。どう考えても多すぎますよね。かといって、ウイルスやその類のものではない、と」

「脳出血は内因性の疾患で、なんらかの病原体が起こすものではありません。今問題になっているインフルエンザですとか、そういう種類の病気ではないのですね。しかし、これだけ特定の地域で一気に死者が出ると、その疑いを持つのは自然なことです」

「対策は考えられないのですか。私のような立場のものが言うのはなんなのですか」

「対症療法や、予防方法は色々ありますが、あくまでご本人の心がけ、と言うレベルの問題なのです」

二人は考え込んでしまった。目下のところ、何が原因かもわからないので、対策の立てようもない。ともかく、お互い何かわかった

ことがあれば連絡をしましょう、と言う事で二人は別れた。宗政は出た後、病院を見上げ、妻の父の死と、妻の号泣を思い出していた。防げるのなら、防いでやる。宗政の眼鏡の奥の瞳は静かに決意に燃えていた。

幸田は一人夜の街を歩きながら、一体どういうことだ？と繰り返して自問自答していた。分布図作成は部下に任せ、自身は適当にピックアップした数人に片端から、まず電話をかけた。不寐で申し訳ありませんが、と前置きし、家族や夫の突然の死に嘆く遺族に、死者の死亡時の様子を聞いてみたのだ。やがて、意外な事実が判明した。質問に応じてくれた人たちの説明によると、なんと全ての死者が直前に煙草を吸っていた。そして、吸うとほぼ同時に発作を起こし、倒れていたのだ。そこには短くなった煙草が煙を上げていたらしい。煙草が原因で脳出血と言うのはありえる。今手元にあるラークにも「喫煙は脳卒中の危険性を高め」と書いてある。だが、何故急に神菜川でだけ死者が増加するんだ？ともかく、捜査に応じてくれると言ってくれた三組の遺族の元へ行って詳しい話を聞いてきた。そして、そのうち一組の善意で、死者が最後に吸っていた煙草をそのまま証拠品として預かってきた。これを鑑識に持っていけば、何か分かるかもしれない。もっと数を集めるべきか。しかし、そんな縁起でもない遺品は捨てられる可能性が高い。新しい死者から絞ったほうがいいか。などと、幸田は暗闇を手探りする気持ちで、帰途についたのだった。

牧野は、今夜も夜勤を勤めていた。幸い、今のところ急患は来ていない。一人、施術した患者さんが相談がある、と待機室にやってきたので、応じる事にした。退院後の通院の割合の相談で、患者は家が比較的遠いので、さて、どうしようか、と考えていた。

「すみませんが、先生、煙草を一本吸ってもよいでしょうか」

「ああ、なら喫煙室のほうへ移りましょう」

何の気なしにそう言い、二人は横のガラス張りの喫煙室に移動した。患者が新品のマイルドセブンライトを開封し、一本火をつけた。途端に、

「おう……はぐあはっ！」

と悶絶し、頭を激しく振り、横っ飛びに倒れた。なんだ！？と牧野が思ったと同時に、牧野の視界が七色に激しく変わり、喉を直接バーナーで焼かれるような途轍もない痛みが襲ってきた。牧野は喉を押さえ、のた打ち回った。その時、胸の鬼子母神のお守りが弾け飛んだ。すると、牧野の痛みは急速に引き、視界も元のように戻った。息が荒い。何が起こったんだ……。床にしゃがみこんで、息を整えていると、看護師が入ってきた。

「先生、どうかなさいましたか！？ あっ、富広さんが？」

「く、急に暴れだしたんだ。まずい！心拍がない！雪野さん、すぐにストレッチャーを持ってきて！」

言うなり牧野は心臓マッサージと人口呼吸を始めた。畜生、何が起こったんだ。ただの胃潰瘍で、完治してたじゃないか。牧野は脂汗を流して応急処置をした。だが、駄目だった。死因は、本能的にわかった。脳出血を起こしたんだ。なるほど、『敵』は煙草だったのか……。ふと、胸のお守りがビリビリに破けているのに気づいた。鬼子母神様が守ってくれたのか？

小石川自身の判断で、この事件を知る者は最小人数がいい、と言う事で、三日後の朝、再び神菜川県警の一室に、署長の小石川、一課の幸田、地方法務局の戸籍係の宗政、そして神菜川総合病院救急治療科の牧野の四人だけが揃った。

「まず、幸田君から、鑑識その他の調査で分かった事を報告させてもらいます」

「はい、まず、犠牲者の分布図を見ると、なんらの脈絡はありません。粒上に神菜川全域に渡っています」

幸田は「犠牲者」と言う言葉を使った。宗政は息を呑んだ。大手

の週刊誌一社はすでに気づいたらしく、スクープで報道していたものの、あくまでも現象しか書かれていなかった。この三日で、新たな死者はさらに八百人ほども増えていた。

「一方、犠牲者の死因を調査してみましたところ、100%と断言できますが、全員が国内銘柄の煙草を一口吸ったところ、脳出血を起こし、ほぼ即死しています」

「話を中断してすみません。私の病院でも、私のすぐ目の前で、同じように煙草を吸った患者さんが亡くなりました」

牧野の話に、幸田は強く頷いた。

「そこで私は、遺族に頼み、その末期の時に吸っていた煙草を二十箱ほど集め、鑑識課に調査してもらいました。結果は、残念ながら、極めて普通の煙草でした。が、しかし、それらには幾つかの特徴がありました。種類はバラバラなのです。セブンスターもあればマイルドセブンもある。しかし、全てJTT、国内産銘柄である事、さらに、賞味期限が一致すること、そして、バーコードを元に、出荷状況までも調べてみたところ、同じ生産工場より出荷されている生産品である事まで把握できました」

幸田はここまで一気に話した。宗政は、さすが刑事は凄い、たった三日でそこまで、と感心した。

「素晴らしいですね。そうしますと、その工場の生産の段階で毒物のようなものが入ったのでは？」

「それを考慮し、実は、今日その工場へ行こうと思っているのです。皆さん、今日は休暇を取っておられますね？」

小石川の問いに、全員頷く。牧野にも宗政にもはや他人事ではない。何が何でも原因を突き止めてみせる。四人は署のハイエースに乗り込み、目的地を目指した。運転する幸田が、

「今から向かうJTTの工場はつい先月から稼働しただばかりのようです。郊外の住宅地を買収して安く手に入れたようです」

と、説明を始めた。

「何か、化学工場の跡地などではないのですね」

「ええ、その類の事を考慮して、少し調べたのですが、古い住宅が連なる町でしかありませんでした」

助手席の小石川も、後ろの二人も沈黙している。そこに行けば何かがわかるのだろうか。窓の外の景色が、少しずつ寂しくなってくる。やがて、郊外の国道を抜け、山道になり、それを抜けると、平地と簡素な住宅街が続き、ややもすると、大きな白い工場が見えてきた。

「あそこです。あれが新ＪＴＴの工場です」

幸田の言う通り、大きな文字で「ＪＴＴ」とあるのが見える。何の変哲もない工場だ。むしろ最新鋭である種の機能美すら感じる。四人は、車を降り、受付で来訪を告げ、前もって依頼していた工場長と会うことができた。

「俄かには信じられない話なのですが……」

ＪＴＴ神菜川工場の工場長である並木義久は額から出る汗をハンカチでぬぐいながら答える。突如知らされた事実、何をどう考えればいいかわからないらしい。無理もない。こちらの四人だって、明白な根拠などは一切持っていないのだ。

「無理ありません。しかし、この工場で生産された煙草を吸った人が、今日までに二千二百人ほども同じ原因で亡くなっているのです」

小石川が居住まいを正して言う。

「そこで、お伺いしたいのですが、本当に何か些細な事でもいいのです、思い当たる節はありませんか？」

「当工場は、最新の設備と、従業員のモラルを備えているつもりです。出来たばかりですし、従業員の意気も高く、問題なく操業を続けているとしか……言いようがありません」

そう言いながら並木はますます額から汗を流している。宗政は、若干の違和感を感じたので、聞いてみた。

「ここは、工場が建つ前は住宅街でしたね？」

「はい、そう聞いております」

「まさか結核病院跡などではないですよね？」

「そういう事はないようです」

改めて横から幸田が言った。だが、その幸田も、そして牧野も、この工場長の態度には違和感を抱いている。

「並木工場長。プライバシーを侵害してまことに申し訳ないのですが、一つお聞きしたいことがあります」

小石川署長がまた威儀を正して聞いた。

「今年の工場操業以降、一人の従業員が作業中に亡くなっておられますね？」

「は、はい、しかし、それは休憩中のことであって、断じて作業内容に問題があつたなどではなく……」

その事は初耳の宗政と牧野は顔を見合わせた。

「死因は、休憩中の脳内出血ですね。名前も全て存じ上げております」

すると、並木が鬱陶しそうに顔を歪めた。そして、苦しそうに言った。

「栗本の奴は、商品を盗んで吸っていたんだ、それで急に倒れても、と正直思っております」

言ってから並木ははつとした。宗政と牧野もはつとした。やはり、ここで出来上がった煙草を吸うと死ぬのか。もはや、それ自体は疑う余地もない。幸田が息を飲んだ。

「なんとか、この工場の生産を止めるわけにはいかないでしょうか」

「それは、無理です。本社にちゃんと説明すればいいんですか」

それも無理もない。やはり、なんとか原因を突き止めなければならぬ。牧野の提案で、ともかく、最低限工場の中を見せてもらう事にした。広い構内に、二つの建物があり、製造と梱包部門に分かれているらしい。従業員も多く、この工場が来ればこの街の経済も活性化したことだろう、などと宗政は思っていた。一通り見学しても、特に何の発見も無かった。牧野は、一箇所、敷地内の樹林の側の排水溝の辺りを通った時、なんとも言えない胸苦しさを感じたが、

それで何ということも言えない。四人は一旦去る事にした。

帰りの車の中で、牧野が思っていたことを話し出した。

「実は、皆さんお気づきかわかりませんが、この事件の犠牲者には一つの特徴があるんです。煙草を吸うのは基本的に男性が多いので、気づかなかったのですが、この事件、実は女性は一人も犠牲になっていないのです。全部男です」

「あっ！そうだ、そうなんですよ。僕も死亡診断書を見たときから思っていたんです」

と、宗政も同意する。

「もう一つ、言い忘れたこともあるんです。実は、三日前、目の前で患者さんに死なれたとき、例の煙草を吸ったので、僕もその煙を吸い込みました」

小石川が興味津々と言う顔で助手席から顔を傾けて聞いている。

「目の前が赤や青に点滅し、喉が焼け付くように痛くなり、もう死ぬのか、とすら思いました。しかし、急激に痛みが引き、視界も元に戻った後、胸の鬼子母神様のお守りが破け散っていたんです」

「一体どういうことだ……男性のみが死に、お守りを持っている人間は助かった？」

「はい。僕は決して霊だのを信じるタイプではありませんが、事実として僕はまだ生きているのです」

一同は、解けないパズルを与えられた子どものようにひたすら考えた。

「署に戻って、あの工場の敷地はかつてどんな場所だったのか、誰が住んでいたのか、徹底的に調べます」

運転しながら幸田が力強く宣言した。宗政も牧野も手伝うことにした。

二日後の休日の朝、小石川を除いた三人は、神楽川県内の高層マンションの一室を尋ねていた。そこには、あの工場が建てられる以

前に、あの住所に住んでいた老婆とその娘夫婦が住んでいた。三人はリビングに案内され、それぞれ自己紹介をし、根幹であろうと思われる事柄を尋ねはじめた。

「そうしますと、園江水樹さんはちょっと変わり者であつたと」

「そうですね。余り人付き合いもしないし、何しろ得体の知れない能力の持ち主だともつぱら噂されてましたからねえ。猫を食べるのを見たとか」

そう言つて老婆、吉田房江はフワフガと笑つた。年の割りにはしつかりしている。

「でも、巫女さんだつたんですね？」

「そうそう、神楽山神社と言つのが二駅ほど向こうにあつてね、その巫女じゃつたんじゃけど」

「元旦に白装束で歩いているのを見たら、それは清楚な感じでしたよ。近寄りがたい美人と言つか」

横から、娘の美奈江が言う。大人しい風貌だが、決して不美人ではない。

「でもなあ、ずっと独身を通しておつてなあ。結婚してりやあないな酷い目に遭わずにすんだろうにの」

房江は急にしんみりとなつた。その酷い目の内容は三人も知っている。

「そこそこ大きな邸宅、死んだ両親の残した家に一人で住んでおつての、男嫌いなのか知らんが、あんな家に一人でおつたもんじゃから、ある日三人の強盗に入られての、後から聞いた話じゃ、数ヶ月も散々酷い目に遭わされた後、斧で切り殺されて、それで庭にあつた井戸に放り込まれたんじゃ。惨いのう」

房江は目じりに涙を溜めた。横に座っている美奈江も目が赤くなっている。

「その、つまり、水樹さんという女性は、霊能力のようなものを持つていたと？」

「私、小学校時代が一緒なんです。その時に、スプーンを曲げたり、

誰がどこにいるか分からないはずなのに当てたりしたんです。でも、大きくなるにつれ、そういう見せびらかしは一切しなくなって、静かに一人で生きていた、と言う印象でした」

幸田は考えていた。その後、警察は犯人を逮捕したものの、奥深い井戸の底に沈んでしまった遺体を取り出せず、無縁仏として処分していた。みんなであの番地の事件を探るうち、園江水樹の存在が判明した。一人つましく生きていた、霊能力の強い女性が、散々理不尽な目に遭って井戸に放り込まれている。その上にあのJTTの工場が建っているのか。三人は吉田家を辞し、高層マンションのエレベーターを降りていく。

「……………どう思いますか」

幸田が誰に聞くとも無く尋ねた。

「復讐をしているんじゃないでしょうか」

宗政が続ける。

「自分を散々侮辱した挙句殺した『男』と言う存在そのものが許せない。その怨念が、頭上で生産されている煙草にこびりつき、吸った男を片端から殺しているのではないのでしょうか」

牧野が続ける。

「全く荒唐無稽ですが、僕にもそんな気がします。なんとか遺骨を探し出して、丁寧に弔うのがよいのではないのでしょうか」

「……………それで解決するならいいのですが、果たしてそれぐらいで『許してもらえる』でしょうか」

三人は黙りこくった。だが、こうしている間にも、あの工場で生産された呪わしい煙草を吸った男が、一人、また一人と死んでいる。

「正確な井戸の場所は把握できるのでしょうか」

「県庁の地図と住所とを照らし合わせればほぼ分かるでしょう」

「上をコンクリでガチガチに固めてあるでしょうね」

言いながら、牧野はとある場所を思い出していた。

「……………場所は分かった気がします。三人で全力を挙げて園江水樹さんを助けてあげましょう」

一刻の猶予も無い、と三人はその足で、あの工場へと向かった。途中、ホームセンターに寄り、スコップやバケツやロープなどを買った。休日の工場は静まっていたが、幸い守衛はいたので、事情を適当に話し、工場長の了解は取ってある事にして、問答無用に入り込んだ。

「その奥です、幸田さん。あつ、あそこです」

敷地外の外に、ポプラの樹が何本か順序良く植えてあり、その横に排水溝がある。幸田は、手元にある少し前の地図と、最新の地図と、園江水樹の住所の位置を比較した。

「確かに、この辺りに園江さんの家はあったようですが……」

「ここに井戸があつたかどうかまでは、どうせ調べられないですよ」
言いながら宗政はシャツの腕を捲り上げた。

「牧野さんの直感を僕は信じますよ。一度殺されかけてますしね」
そして、力を込めて排水溝の側を掘り始めた。牧野も幸田も続く井戸があつたのなら、それらしき石なりが積み上げられていたはずだ。

「おっ！？ これは」

幸田が何かを掘り当てた。円形に沿って土を払っていくと、確かに井戸らしき輪郭が見えた。三人とも既に泥まみれだ。時計は午前十一時を指している。

「土は柔らかいな。ただ上から入れただけ、と言うところでしょうか」

「今日中に水樹さんを発見できるでしょうか」

「急がないと、誰かが死ぬ。こんな話、この三人以外誰も信じやしない」

三人は力の限り掘った。基本的には肉体労働をしない三人に、春の日差しは次第に苦痛になってくる。汗が体中から吹き出る。少しずつ、体が地下に潜る形になってくる。バケツに放り込む役、それを持ち上げる役を交代ですることにした。人がすっぽり入り込める

ところまで掘って、昼になったので、幸田がコンビニまで車を走らせ、昼食をとる事にした。

「どれくらい掘ればいいんだろうか」

宗政が力無く言った。なんでもそうだが、ゴールの見えない作業は精神的に辛いものがある。しかも、この下に必ず園江水樹がいる、と言っ保障も無いのだ。

「この真上、通路みたいなのがありますよね。ここを必ず製品が通るつくりでしたね」

牧野が言う。そう言えば、そういう説明を受けた記憶がある。

「となると、その時に煙草に怨念を籠めたのかなあ」

幸田がそつと呟く。立場上、一番使命感を持っているかもしれない。だが、それは医者牧野も同様だ。ただ、宗政に至っては、妻の祖父を殺されている。宗政の妻の父も、この工場で生産されたキヤスターを吸っていた。その分、複雑な想いを抱いてもいるのだが、今はひたすら掘ろうとしか考えていない。

「さあ、急ぎましょう！」

幸田の声で、再び三人はがむしゃらに掘り出した。ひたすらに掘った。牧野は、顔まで泥にまみれながら、いつしか泣いていた。牧野の脳裏に、映画のワンシーンのように、水樹が男らに繰り返し強姦され、食べ物も与えられず、虐待を受けている場面が浮かんだ。酷い。人間は、男は、ここまで鬼畜になることができるのか。水樹さん、辛かったろう、苦しかったろう、俺達が憎くてしょうがないだろう、でも、無差別に殺すのはやりすぎだ。あなたが殺されて無念だとしたら、今死んでいっている男達も同じように無念なんだよ、もう止めて、もう止めてくれ。そんな事をしても意味はないよ、僕らが仏様をお願いしてあげるから、安らかに天国に行きましょう。光射さぬ地底で一人埋もれていたんだね、誰にも祈ってもらえずに、でも、もうすぐそれは終わるよ、牧野が涙を流しながら無我の境地でシャベルを動かしていると、硬い手ごたえがあった。手で土を払う。かなり掘ったので、すでに光が殆ど射さない。でも、牧野には

すぐに分かった。

「ここにいたんだね、園江水樹さん。さあ、光射す場所に帰ろう」
そこには園江水樹の頭蓋骨があった。牧野、宗政、幸田の三人は、遺骨を引き上げて、その場にぼったりと倒れしばらく休憩し、そして、これで終わった、と確信することが出来て、互いに泥だらけの顔で微笑みあった。

日ならずして、小石川署長の顔に笑顔が戻った。確かに、あの三人が遺骨を引き上げて以来、一人も犠牲者は出なくなった。それでも、3千人近い喫煙男性の命が失われてしまった。今更ながら、マスコミも日本政府も対策を、などと言っているが、もうその必要は無い。出来る事は、真実を知る四人が、定期的に園江水樹の菩提を弔うことだけだ。いや、まだある。小石川はキツと顔を引き締めた。あのような鬼畜な犯罪が二度と起きないように、警察が万全を為すことだ。小石川は、早速大股で署内の見回りに赴くのだった。幸田はやってきたその姿を見て、苦笑しながら内心怖い怖い、と思った。その後、ふと自問自答した。本当に怖いのはなんだろう。理性を失った人間かな。幸田は今日も明日も、理性を無くした人々と対峙してゆくのだった。

宗政は妻にだけは、と思い、ある夜、ありのままに話した。妻は最初半信半疑だったが、やがて夫の言う事を信じた。そして、不幸なその女性のために、と般若心経を唱えるのだった。宗政は神菜川県民を救えた、と一安心すると同時に、人間の業の奥深さに一人嘆いてもいるのだった。

牧野は、今日も救急治療科で不意の病や怪我に苦しむ患者を助けるために奮闘していた。が、ある夜勤明け、まだ暗い中を家路に歩いてみると、なんと街外れで一人の女性が黒いボックスカーに連れ込まれようとしているではないか。一瞬、体の疲れと、怯えとが、

牧野に「見てみぬ振りをしろ」と言った。が、次の瞬間、そんな真似をしたらまた園江水樹さんのような女性が生まれてしまう、と悟った。そんな事は絶対に許さん。牧野は発進しようとしているボツクスカーの前に出て、乗っているツーリングワゴンを横止めにした。これで発進出来ない。牧野は蛮勇を奮って、飛び出してきた三人組のチンピラと戦った。が、相手は鉄パイプや金属バットを持っていた。思い切り鉄パイプで頭を叩かれ、意識が朦朧として、牧野は道に倒れこんだ。その時、その薄れ行く意識の中で、牧野は確かに見た。空から白い天女のようなものが舞い降りて、自分の前に立ったのを。天女が手を泳がせると、あっという間にその三人は気を失った。天女はゆつくりとこちらを振り返った。ああ、あなたは、と牧野は思った。天女は微笑んで視界から消えた。次に目に映ったのは、自分を介抱してくれている浚われそうになっていた若い女性だった。痛む頭を抑えながら、やっぱり救う側のほうがいいよな、と思いいながら、明けていく夜空を見上げた。（終わり）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9808g/>

午後に伸びる影 -ホラー短編小説集-

2010年11月12日16時25分発行